

II-1-1 国語科

(1) 研究仮説

『伊勢物語』(23 段)と『大和物語』(149 段)は、同じ内容でありながら本文が異なる。両テキストは、いわゆる別本の関係にある。『伊勢物語』(23 段)と『大和物語』(149 段)を読み比べて本文異同から物語世界の独自性や改作の意図について考察する。この 2 つの古文テキストを読み比べる学習は、本文異同を通して本文の表現を「問う」ということに収斂されていくであろう。

(2) 実践

ア 実施日時 令和 3 年 12 月 22 日(水) 4 限

イ 実施場所 全日制普通科 1 年 D 組

ウ 参加生徒 生徒 40 人

エ 行程 『伊勢物語』(23 段)は授業で既習済み。『大和物語』(149 段)は事前学習課題。

オ 実施内容

学習活動	指導上の配慮事項など	評価・方法など
【生徒の立場】	○【指導者の立場】	
『伊勢物語』(23 段)と『大和物語』(149 段)を読み比べて、グループで交流する。		
1 〈導入〉個人ワーク(PC) Google フォームで回答。 『伊勢物語』と『大和物語』を読み比べて、本文異同について気付いたことを箇条書きで書く。	○比較しやすいように便宜上、『伊勢物語』と『大和物語』の本文の対応箇所を、それぞれ【A】・【B】・【C】の三つの場面に分け、比較の観点を示す。	○生徒が Google フォームで回答したものを点検。
2 〈展開〉グループワーク Google スライド使用。 グループ内で各メンバーの気付いた本文異同について話し合う。	○自分一人では気付かなかった本文異同について、グループ内の交流を通して気付かせる。	○読み比べを通して、本文異同に気づき、それぞれのテキストの独自性や、改作の意図を分析している。生徒がグループごとに提出した Google スライドの点検。
3 〈まとめ〉 『大和物語』の本文の独自性や改作の意図を考察する。その後、Google スライドにまとめる。	○『伊勢物語』にはなくて、『大和物語』にはあるものは何か。本文の省略と増加に注目させる。そして『大和物語』の独自性や改作の意図に気付かせる。	

(3)評価 SSHアンケート(国語「問う力」に関するアンケートによる)

ア ①参加生徒の反応

③ この授業(企画)によって、「あって欲しい...を、これまでよりも考えるようになりそうですか？」
40件の回答



②参加生徒の感想(一部抜粋)

- ・読み比べることで、どこがどう変わり、なぜ変わったのかなどを考えることができて、以前より古文に興味がわきました。
- ・似た話でも表現の仕方が違ったりあるものとなないものがあったりして、それぞれの主張したいことが読めて面白いと思った。また、今回の学習で少し古文に興味を持つことができた。
- ・読み比べて、何が違うかだけでなくその違いによって読み手はどのような受け取り方になるのかまで考えるところが興味深かった。
- ・同じ物語でも見る人によって感想や感じ方が違うというのを可視化した状態で感じることができたのでいい授業だった。人によって必要だと思うもの、思わないものが違うので、読み比べることで、新しい発見ができるので楽しいなと思った。
- ・改作をすることには何か意図があって行われたものであり、読み比べることによって新しい発見ができて楽しかった。物事には意図があることを忘れずに、また、様々なことに問いを持たせていきたいと思う。

イ 考察

本校では、「問う力」を「『有って欲しいのに無いこと』に気づく力」と定義している。今回の授業実践は、従来型の古文授業に見られる品詞分解や現代語訳を中心とする授業とは大きく異なる。二つのテキスト間の本文異同に着目し、テキストの独自性や改作の意図を考察する点にある。国文学研究における「異本文学論」の手法を取り入れたものである。アンケートの結果が示すように、生徒は今回の読み比べの授業で、古文テキストの本文異同に着目し、新たに「問う力」を考えることができたことと思う。

ウ 今後の課題(「問う力」を育むための授業構想に向けて)

SSHの指定校である本校における国語科の位置づけは、いわゆる人文科学ということになるであろう。すなわち既存のものを越えていく、アカデミックな新しい授業スタイルを指向していかなければならない。今回の教育実践の内容は、私の大学院(修士・博士)時代の研究の一端によるものである。今後も、国文学研究と国語科教育を融合させた新しい授業スタイルの実践を目指していきたい。